謝　辞

この報告を作成するにあたり,現状のトノサマガエルとトウキョウダルマガエルの分布についてアドバイスや資料をくださった高井孝太郎氏には,この場を借りて感謝の意を表します.

引　用　文　献

北海道. 2010. 北海道ブルーリスト2010「トノサマガエル」. 〈 http://bluelist.ies.hro.or.jp/db/detail.php?k=04&cd=3 〉. (2012/9/15 アクセス)

前田憲男・松井正文. 1999. 日本カエル図鑑(改訂版). 文一総合出版. 東京. 223.

斎藤和範・富川徹・横山透. 1998. 北海道におけるトノサマガエル及びトウキョウダルマガエルの新分布地. 旭川市博物館研究報告4:25-29.

Kotaro Takai. 2011. The origin and ecology of *Rana nigromaculata* introduced into Hokkaido. PhD Dissertation Submitted to Division of Bioscience, Hokakido University, Hokkaido, Japan.

竹中践. 1993. 北海道・広島町におけるトノサマガエルの生息状況. 爬虫両棲類学雑誌 15 : 84.

竹中践. 1997. 北海道に帰化したトノサマガエルの北広島における分布. 北海道東海大学紀要理工学系 10 : 43-49.

北海道の島嶼の爬虫類・両生類のいくつかの記録

竹中　践

005-8601　北海道札幌市南区南沢 5-1-1　東海大学生物学部生物学科

近年, 日本の爬虫類と両生類の減少は著しく, 環境省が2012年8月に公表した第4次レッドリストでは, 爬虫類の絶滅のおそれのある種は, 評価対象種のうちの37%(準絶滅危惧種等を含めたレッドリスト掲載種は57%), 両生類は同様に33%(同65%)となっている. この要因としては, 生息地の減少や生息環境悪化のほかに, 移入・増加した捕食者の影響や他種との交雑など, 複雑な様相を呈している.

絶滅のおそれのある種が増加している状況において, それぞれの種の具体的な実態の把握はある程度進んでいる. しかし, そのための記録の量は, まだまだ不足しているといえるであろう. とくに, 以前はふつうにみられた種ほど, 過去の記録は乏しく, 調査記録の確認種リストに記載される程度であることが多い. しかし, 近年急激に減少して, レッドリストに掲載された種の中には, 以前はごくふつうにみられ, 減少することなど予想すらできなかった種も含まれる.

減少の兆候を察知するためには, ふつうにみられるときにおいても具体的な記録があることが必要である. それは, まとまった報告書である必要はない. その意味において, これまで

の調査で断片的に得られた記録を報告していきたい.

ここでは, 北海道の日本海側の奥尻島, カモメ島, 焼尻島, 礼文島の過去の調査から生息に関する記録を報告する.

奥尻島　1977年9月10日

奥尻(環境省メッシュマップ「以下省略」6339-14-91)

海沿いの道路から上がった野菜畑周辺で, ニホンカナヘビ28個体を目撃または捕獲. アオダイショウ1個体を計測後放逐. 水たまりでニホンアマガエル幼生を記録. 近所の人から, 9月中旬から子ヘビがでてくる, カラスヘビがいるという聞き取り情報を得る.

幌内(6339-23-34)

川沿いのクズやササの草むらでニホンカナヘビ3個体を捕獲. また, ヒガシニホントカゲを複数目撃. 当時は, 海岸の集落に温泉小屋があり, 川向いのやや高い道路沿いに幌内荘があった.

注)ヒガシニホントカゲの和名は, 従来のニホントカゲが, 新種記載によって2種に分けられたことによる, 日本爬虫両棲類学会の標準和名2012年8月27日改訂案の, ヒガシニホントカゲ(*Plestiodon finitimus*)にしたがった(Okamoto and Hikida, 2012).

奥尻島　1999年9月3日～5日

球浦(6339-24-50)

林道わきでニホンアマガエルの鳴き声, ニホンカナヘビ幼体1個体を目撃.

幌内(6339-23-34)

1993年の北海道南西沖地震の津波による被害で海岸付近は草藪で被われ道路も消滅していた. 幌内荘の建物は残っていたが, 付近の道路周辺でのニホンカナヘビおよびヒガシニホントカゲの確認は得られなかった.

ニホンカナヘビは,他の地域で確認できたが, ヒガシニホントカゲの存続が危惧される.

湯浜(6339-13-79)

海岸沿いの林からニホンアマガエルの鳴き声.

藻内(6339-13-44)

林道わきでニホンカナヘビ15個体を目撃または捕獲. 用水池でニホンアマガエル幼生. シマヘビ1個体を捕獲し, 胃内容物確認後放逐.

藻内(6339-13-34)

発電施設付近でニホンカナヘビ4個体を目撃または捕獲. ニホンアマガエルの鳴き声. 落木下でニホンカナヘビの卵または孵化後の卵殻を30個見出した. 同じ場所に7, 8個体が産卵に来たと推定できる.

藻内(6339-13-45)

林道わきでニホンカナヘビ8個体を目撃または捕獲. 沢だまりには何もいない.

青苗川(6339-13-27)

林道わきでニホンカナヘビ2個体を目撃または捕獲.

青苗富里(6339-13-07)

河畔でニホンアマガエル成体1個体捕獲, 幼体4個体目撃.

青苗富里(6339-03-86)

道路でシマヘビの轢死体.

青苗富里(6339-13-06)

水田地域の奥の沢周辺でニホンアマガエルを多数目撃.

恩顧歌(6339-14-50)

林道と川原の草むらでニホンカナヘビ10個体捕獲または目撃.

赤石(6339-14-70)
林道でニホンカナヘビ幼体1個体目撃，林床でエゾアカガエル亜成体1個体捕獲.
宮津(6339-24-52)
道路わき斜面でニホンカナヘビ4個体目撃.

なお，この調査では地元の方からの聞き取りを行ったので，以下に記す．かっこ内は著者の注釈.
聞き取り1(奥尻空港付近の畑の夫婦)
畑に大きな白いカエルがいた(アマガエルと思われる)．昔マムシを酒につけたという話を聞いたことがある．カラスヘビはいる.
聞き取り2(青苗富里の畑のおばさん)
アオダイショウとカラスヘビはよくいる．マムシはたまにいるというがよくわからない．カエルは緑色の小さいものがいる.
聞き取り3(青苗富里の水田のおじいさん)
アオダイショウと黒色のシマヘビがいる．マムシはいない．シロマダラというヘビは知らない．アマガエルはいる．茶色の大きいカエルがいる(エゾアカガエルと思われる)．以前，青苗川が曲がって蛇行していたころは水田の横の川のまわりの水たまりに卵が産まれ，大きいオタマジャクシが多数現れて気持ちが悪かった．その後付近にはいなくなった.
聞き取り4(青苗富里の奥の水田のおじいさん)
アオダイショウとカラスヘビがいる．マムシはいない．茶色のカエルは，昔は水田にもいた．今でも時々歩いている．オタマジャクシは大きくて黒い．アマガエルは，戦前はいなかったが，下の水田の青森出身者が放したらしい.
聞き取り5(青苗下の方の水田のおばあさん)
60年前に青森から来た．昔は大きなかたまりのカエルの卵が見られた．苗代にも産んであった．青い(緑の意味)カエルはその頃は見なかったかも知れない．最近たけのこ採りに山に入ったらかたまりの卵が産んであった.

かもめ島　1976年5月26日
厳島神社付近(6240-60-39，6240-60-49)
神社付近の小道のわきでヒガシニホントカゲ5個体捕獲(写真1,2).

かもめ島　1979年7月17日
厳島神社付近(6240-60-39，6240-60-49)
神社付近の小道のわきでヒガシニホントカゲ3個体捕獲．アオダイショウも目撃した記憶が

写真1.かもめ島の道わきに現れたヒガシニホントカゲ(中央の枯れ草のあいだ)

写真2.かもめ島のヒガシニホントカゲの生息環境(1976年5月)

あるが，筆記記録していなかった．

かもめ島　2010年6月18日
厳島神社付近(6240-60-39，6240-60-49)
かもめ島は人工橋の入口あたりから北の部分と南の部分にくびれているが，厳島神社や灯台がある北の部分は，すべて芝生が植えられていて，もともとの草むらはまったくなくなっていた(写真3)．訪れた時間が15:25と遅かったため確認はできなかったが，島の北の部分は爬虫類の生息には適さなくなったと考えられた．なお，南部は両側が急な斜面の稜線状になっているので，観察はむずかしいが，生息は可能と考えられる．

焼尻島　1998年9月19日～20日
東浜付近(6641-53-24)
海岸から上る道路周辺でニホンカナヘビ10個体を目撃または捕獲．神社付近の道のわきの草むらでニホンカナヘビ5個体を目撃または捕獲．
雲雀ヶ丘公園(6641-53-23)
パークゴルフ場付近の倉庫わきやササ原でニホンカナヘビ3個体を目撃または捕獲．

写真3．かもめ島の厳島神社付近の状況(2010年6月)

島全体を調査したが，めん羊牧場の地域ではニホンカナヘビも確認できなかった．旅館のおじいさんからの聞き取りでは，マムシはいない，アマガエルは浜の水たまりで鳴くとのことであった．確認できたニホンカナヘビについては，島の東部の水源涵養林周辺と人家周辺の草むらに生息分布が偏っていると考えられた．なお，調査中に2個体のクマネズミ大のネズミを目撃しており，数が多いのではと思われた．

礼文島　1976年7月13日
久種湖(6848-10-13)
エゾアカガエル成体雌1個体を捕獲，頭胴長64mm(写真4)．キャンプサイトのわきに細い水たまりがあり，幼生も確認できた(写真5)．
この場所はその後駐車場に整地されてしまった．

奥尻島の爬虫類・両生類相について，大野(1968)は，ニホンカナヘビ，アオダイショウ，シマヘビ，シロマダラを記録している．
本報告では，ニホンアマガエル，エゾアカガエル，ニホンカナヘビ，ヒガシニホントカゲ，アオダイショウ，シマヘビを記録した．生息確認については，そのときの状況や偶然の要素に

写真4．礼文島のエゾアカガエル(雌成体)

写真5. 礼文島で確認したエゾアカガエル幼生

左右されるが，ニホンアマガエルとヒガシニホントカゲについては，留意してもよいかもしれない．1977年にヒガシニホントカゲを目撃した地点は，温泉の影響で道沿いが温かく感じられた．その場所が，北海道南西沖地震の津波による被害で，環境が大きく変化し，生息確認ができなくなってしまった．確認時に採集や写真撮影ができなかったため，現時点で証拠のある生息記録はないことになる．ニホンアマガエルについては，地元の聞き取りで，かつてはいなかったという話しがあった．真偽のほどは不明であるが，本種の日本全体の島嶼での分布頻度の高さを考えると，非意図的人為移入の可能性に留意してもよいかもしれない．

かもめ島は，江差の海岸に接近して存在することから，陸との隔離の程度は低いと考えられる．しかし，小さい島の孤立した個体群であるので，ヒガシニホントカゲとアオダイショウの状況には注目していく必要があるだろう．

焼尻島のニホンカナヘビと礼文島のエゾアカガエルについても，生息場所は島内の限られた地域である．生息基盤は脆弱といえるので，注意を払っていく必要があるだろう．

引　用　文　献

Okamoto, T. and Hikida, T. (2012) A new cryptic species allied to Plestiodon japonicus (Peters, 1864) (Squamata: Scincidae) from eastern Japan, and diagnoses of the new species and two parapatric congeners based on morphology and DNA barcode. Zootaxa 3436: 1-23

大野正男，1968．日本海沿岸島嶼の両棲・爬虫相．東洋大学紀要（教養，自然科学）9:99-105.